



## 北関東循環器病院 開院30周年記念

### 開院30周年にあたり

理事長・院長 市川 秀一

平成元年（1989年）4月10日に開院しましたので、実際は開院29年ということになりますが、昨年12月に当院の3期工事として外来棟（透析、リハビリ、ダイニングカフェそして管理部門を含む）が竣工したのに合わせこの4月に30周年としての記念事業を企画しました。これは、20周年記念事業後の10年間のまとめをし、新たな一步を踏み出す記念事業になります。

20周年のキャッチコピーは当院の英文名「Cardiovascular Hospital of Central Japan」の頭文字をデザインしたロゴマークのCCJ（上掲載）にちなみ、「Change, Challenge and Jump」とし、昨年最後のキャラクター「J」のJumpをして念願の外来棟を竣工致しました。今年は、新たなキャッチコピーとして「C」頭にさらに「C」を加えました。その「C」は継続「Continue」の「C」であり、最後に「Next Stage」を追加しました。まさに、この30周年を契機に継続しての改革、挑戦、飛躍を図り、次の段階へ進む第一歩とする決意をしました。

この10年、医療・医学の進歩は目覚ましいものがあり、それに対応する努力をしてきました。一方、医療理念、行動指針はこれまで通りですが、超高齢化社会に突入して高齢者医療にも積極的に取り組んで参りましたが、さらに積極的にこの分野に参入していく予定であります。

今回は記念誌として小冊子を作製する代わりにペーパーレスの時代に合わせ、当院のこのホームページを利用することにしました。これまでの経過、業績等も詳細に掲載されており、是非ご覧になって頂ければと思います。

群馬県の医療も、その中心的存在である群馬大学の医療事故の問題から大変な危機的状況になっています。全国的な産婦人科、小児科の医師不足に加え、外科系の医師不足は今後の群馬県の医療にとり大きな課題となっています。当院も少なからずその影響を受けましたが、入院棟はもちろん、新棟の外来棟を最大限に稼働させることが当面の課題となっています。

30周年にあたり、多くの問題が山積しておりますが、是非共皆様のご支援、ご鞭撻にあずかり、当院の更なる発展にご協力をお願い申し上げる次第です。

## 希望の光を感じて

理事長補佐・看護部長 佐藤 ひろみ

満開の桜がはれの舞台を彩り 30 周年式典に相応しい舞台の幕が今上がった。この良き日に北関東循環器病院に勤務することができ、大変光栄であると共に 30 年この病院を支えてきた全ての方々に心から敬意を表すと共に深く感謝申し上げます。

さて、時代を象徴する歌がある。

「糸」縦糸と横糸が織りなす総べを歌っている。30 年の歴史をこの「糸」が紡いできたのが北関東循環器病院だ。2004 年中越地震 2011 年東日本大震災と経験したにも関わらず北橋の地に不動明王のごとく君臨している。まさに最強の糸が織りなした姿である。

未来の病院がまとうであろう金色のベールをこれからも一本一本心をこめて今私達が織り進めなければならない。それはきっと 1000 年先も光を失うことなく輝き続け、北橋から日本各地へ、そして世界へ受け継がれていくことを心から願いたいと思う。

これからも止まることなく走り続けるであろう。病める人のために。そして希望に満ちあふれた次世代の医療の担い手たちのために。

## 創立 30 周年を越えて

副院長 熊倉久夫

病院の創立から、すでに30年の月日が流れようとしている。ゼロからの出発であった創立時から次々に起こる様々な難問にぶつかり、苦闘を続けた30年であった。

難題を乗り越えて、新しい治療に挑戦し続けてきた。新技術を取り入れ治療できた患者さんの喜びに励まされた。責任の重大さに、降りかかる重圧に、うち震えた時もあった。

多くの熱意あふれる同僚の努力と苦闘、アイデアや創造性に支えられ築き上げてきた今日の技術や業績。これらの技術や伝統をさらに発展させてほしい。さらに、若い世代にこれまでの様々な経験を伝えたい。

そして、再び未曾有の医療危機、医師不足の到来。地方の医療崩壊が叫ばれる中、院内はもちろん院外施設とさらに強力な連携や協力を築き上げ、新たな時代を歩み続けなくてはならない。患者さんを見つめた良心的な医療を目指して、よりよい最先端の医療を目指して。歩みを止めることはできない。すでに次の一步が始まっている。

## 30 年への感謝、そして その先を見つめて

業務部長 城田知彦

当院は今年4月10日に開院30周年を迎えることができます。これも偏に皆様のご支援のお陰と深く感謝申し上げますとともに、職員一同30周年を共に祝いたいと思います。

「周年事業」は組織固有のDNAを見つめ直すきっかけとなりますし、「周年」は当院の未来と可能性を見つめながらの活動が可能となる最大のチャンスイヤーとも言えます。

今日の厳しい医療環境の中にあって、“for the patients”の精神のもと、より良い医療を継続して患者さんに提供していくためには、医療というフィー

ルドにおいて総合力が勝負となります。そのために必要なことは、目標の共有化と団結力であります。職員全員が目標に向かって団結力を発揮したとき、その先には明るい光が見えると信じています。私も英知を振り絞り全身全霊を注いで当院の Next Stage への発展に向け努力して参ります。今後とも、倍旧のご支援をよろしくお願い申し上げます。

私の大切にしている言葉の紹介をもって、私の覚悟とさせていただきます。

座右の銘： 「覚悟に勝る決断なし」、 「胆力」

## 30 周年記念に向けて

副看護部長兼務 2 階病棟師長 大平徹子

北関東循環器病院は、地域医療に根差し、地元に着した医療を提供し循環器医療に力を入れてきました。昨年 12 月に外来棟を新築し、地域の皆様に新しい環境を提供できたことは、喜ばしいことと思います。

看護部も昨年から新部長が就任し、地域の皆様に「必要な看護・介護が受けられる」ことを信念に持ち看護部一丸となり業務に努めています。

今後も医療は絶え間なく進歩し続けますが、30 周年という節目に「志」を新たにし、今後の発展を祈念してご挨拶とします。

## 30周年を迎えて

外来 副看護師長 福島 節子

北関東循環器病院が30周年を迎え、病院の景色やシステム・スタッフなどがだいぶ変わりました。看護職の場合、新人教育のプログラムが刷新され成長しやすい環境に生まれ変わりました。病院としても、2014年6月から電子カルテの導入により混乱した日々を過ごしてきましたが、ようやくスタッフも手順に慣れスムーズに動けるようになりました。また、外来は昨年12月に新外来棟が出来て新たな雰囲気でも業務改善が行われています。今後も病院の理念に基づき看護を提供していきたいと思っております。

## 30周年を迎えて

放射線課 技師長 本庄 孝吉

北関東循環器病院開院30周年おめでとうございます。  
ここ数年の医療技術の発展にともない、放射線画像診断領域においても、画像撮影装置の進歩、画像処理技術の向上、PACSや電子カルテなどのデジタル化の普及、フィルムレスによるモニター画像診断への移行等、著しく進化してきました。それにとともない、放射線課の業務内容も大きく変化してきました。検査件数は増加し、検査内容も多様化・高度化し、より専門的な知識が求められるようになってきました。当院の放射線技師の人数も、開院当初の3名から現在7名まで増員され、様々な検査に対応してきました。

今後も、刻々と発展する医療技術に対応すべく、専門職として技術・知識の向上に励み、質の高い画像情報を提供し、安全・安心な検査で地域医療に貢献できるよう放射線課一同努めていきたいと考えています。

## これからへの歩み

検査課 技師長 高田 裕之

開院20年、さらに10年経過し検査室の礎は十分築かれた。将来に向けて我々はどうあるべきか。依頼を待っている検査技師、検査室は時代遅れだ！臨床検査技師は、専門性を発揮するだけでなく業務をひとつひとつ拡充し看護支援や臨床支援をすることで病院にとって、患者さんにとって、地域医療にとって必要不可欠な存在にならなければならない。そのことを皆で共通認識して業務に邁進していきたいと思う。



## 今10年の歩みや未来に向けて展望等

ME課 技師長 市場 賢一

創立30周年、誠におめでとうございます。一職員ながらお喜び申し上げます。変動する時代の中で常に一步先を見据える取り組みから、今後も学ばせて頂きます。

以前介護福祉士の方に介護における5大要素の言葉をお聞きする機会がありました。略称で「いろはにご飯」といい、「い」は移動、「ろ」は風呂、「は」は排泄、そして「に」は認知をそれぞれ示しています。これに「ご飯」の食事を加えた言葉です。これらに関する支援を考え、実践することが生き甲斐であり使命だと教えて頂きました。経験値ばかり増え耳年増となった私には新鮮であり、原点回帰の言葉に聞こえました。

患者様の生活基盤を支えていく「チーム医療」の現場の一人として間接的ですが、5大要素を安全に確保する病院体制構築の一躍を担っていければと考えております。

地域的に必須な「急性期医療における医療資源の効率的使用」と「医療と介護の連携強化」の融合が、病院と患者様の同じ希望となることを切に願っております。

皆様のますますのご発展とご健勝を心より祈念申し上げます。